

殻色は帶黃色或は橙褐色にして下方は薄し

直徑 五

產地 三崎 紀伊 備後 淡路 小笠原

Section *Ornustus* Hand A. Ad.

殻は壓迫されたる圓錐形にして廣く深き臍を有す、周縁には長き突起を正しく回置す、螺頂の近傍なる縫合線にのみ多少殻片或は石等を裝ふ

此種を見ず

(此族おわり)

● 日本蟹類通説

寺崎 留吉

蟹類は動物界中最も採集し易き部類の一にして何人とも雖其數種を目撃記載せるものなれば從て之れを平易に通説したる小籍のあるも不要に非ざる可し不肖久しく理科大學に遊ぶ幸に同學所藏の豊富なる標本及び參考書冊閱讀の自由を得たれば茲に淺識を厭はず草稿を繕め試みに江湖の高閣を仰がんと欲するなり

緒 説

(3) 予が茲に蟹類と掲げて漠然其區域を示すところのものは

日本蟹類通説(寺崎)

從來教科書に *Brachyura* と名づけ譯して短尾類と云ひ、りたる動物を總括しての義なり即ち節足動物中甲殼類の一目十脚類の内に在りて甲殼類中最高等の位置に居るものなり輒近學術上の情況にては久しく慣用したる *Brachyura* なる語は稍々其意義を縮限したる例もあれば予は故らに短尾類なる語を棄て蟹類といふ廣義の文字を撰びて呼用に便にせるなり強て其意義を質さばオルトマン氏の謂ゆる *Oxystomata*, *Brachyura genuina* の二區域を併括せるものと答へざる可からず尙ほ分類の方法に關しては後文に於て更に詳説せんとす

泰西動物學傾學中殊に甲殼類の分類研究に與りて力あるは枚舉の遑あらずと雖とも先づ古きはリンネウス (C. v. Linné 一七六〇年頃) 氏を源としフワプリシユス (Fabricius 一七九〇年頃) デスマレスト (Deshmarest 一八二〇年頃) ラトレアル (Latreille 一八〇〇年頃) ラマーク (Lamarck 一八〇〇年頃) リーチ (Leach 全上) 氏等孰れも十八世紀の末葉より十九世紀の初めに亘りて各著作の世に出でたるものあり十九世紀の中期に降りて ミルン、

(4)

エドワルツ(M. Milne-Edwards) ヘル(Bell) デナ(Dana)
 ホソイト(White) スチムソン(Stimpson) キングスレー
 (Kingsley) デ・ハーン(de Haan) の諸大家あり次に前世
 紀の末に到りてハスエル(Haswell) マイアース(Miers)
 テ・マン(de Maan) ア・ミルン・エドワルツ(A. M. E.)
 スミス(Smith) オルトマン(Ortmann) ラトブム(Fathbu-
 るシ) 氏等各顯著なる研究を出だして功績赫々たるもの尠
 からず従て分類の順序等に就ては見解を異せるところ多
 くして容易に符合す可きものに非ず、かく整合せざる所
 以のもの皆各據る處ありて然る可きことならば淺學の如
 き孰れも撰ぶも恐くは誤なかる可し、予が本篇を綴るに
 臨み獨りオルトマン氏の分類法に基きたるは蓋し同氏の
 分類は本邦産蟹類を最も夜く蒐めて以て立案したるもの
 なればなり而して該の其本標品なるものは往年我醫科大
 學の講師たりしデーデルダイン氏が一八八八年の頃銳意採
 集して獲たるものにして今や獨逸ストラスブルグ大學陳
 列室に保存せらるゝなり
 本邦沿海の蟹類に就て既に先輩の著作少からず有名な

るシーボルト日本動物志の中に蟹に關する部分は一大冊
 をなす三十餘の完全なる石版書を挿む其調査は澳國デ、
 ハーン氏の功に係る、後一八五二年デナ氏の大著述表は
 る其載する所は一八三八年より向ふ五年間、北米合衆國
 の探險船ウキルケル氏の指揮の下に東西兩洋を巡航して
 採集したる甲殻類の記録にして就中フキジー比律賓諸島
 の産最も多く本邦西南諸島の蟹類亦夥く此の裡に含ま
 る、尋でハンゴルト、ロッジア兩將の指令の下にスチ
 ムソン氏の合衆國北太平洋探險無脊椎動物の總括記録世
 に著はるゝ豫定なりしが惜哉其無慮の貴重標本は一八七
 一年シカゴ市の大火のため悉く灰燼に歸し唯僅かに行文
 簡單なる豫報のみ世に残れるなり其中に本邦沿岸よりの
 標品多數列舉せられ新種屬を設けられたるも少からず、
 英國探險船「チャレンジャ號」は一八七五年五月瀬戸内海
 並に東京灣に投網を試み、一八七〇年—一八七七年の間
 本邦沿岸英國測量船セント、ジョン氏の令率する所とな
 り、傍ら日本海の蟹類を集めたり此等は共に英人マイア
 ース氏を煩はして調査せられたり前者は有名な「トヤ

レンジャ」報告となり後者は英國動物學會一八七九年の記事に表はる、尙ほ一八八七年並に一八九五年頃に渡りてデ、マン氏馬東多島海錫蘭附近の蟹類の記録あり本邦にも通して産する蟹類其中に包有せらるゝもの少からず最後にオルトマン氏の研究は載せて一八九四年乃至九六年の獨逸エナ動物學年鑑にあり

予が親しく檢したる標品は東京帝國大學理科大學動物學教室陳列室所藏のものに係る該品は概ね大學より採集のため派遣せられたる獲物にして之れに加ふるに學士學生諸氏等が時々他品と共に集め來りたるもの、予が手から獲たるもの在地方知人より寄贈せられたるもの並に海外の大學博物館等より贈られたるものをも交へり、參考に供したる書籍は亦同教室備品並に主任教授箕作博士等の私有に係る、故理學士弘田貞守君は自ら日本甲殼類の調査に着手せられたりしが其の蹟未だ世人に報ずるものなくして逝去せり可惜哉、同君の遺書並に採集に係れる品少からず予が研究のため緒を得たる材料少からず聊か追謝の意を述べ

本學所藏の本邦産蟹類は主として本州西南半部及び九州琉球、臺灣に跨る、相摸三崎前の實驗所附近の産最も多數を占む之に反して奥羽、北海道よりの採集品は殆んど無きが如し將來は此の方面に意を注ぎて採集せんと欲するなり、前記産地を地方順に排列すれば左の如し

東京市場

相摸三崎 並に其附近

相摸洋 「ゾルデン、ハイ」飯島教授、實驗
「ンド」號探險船(明治二十七年)所漁夫等

安房小湊 (一八八五年、明治十八年春)

駿河江浦 (一八八四年、明治十七年春)

淡路洲本、紀伊和歌浦、田邊 栗山昇平氏

小笠原父島 (一八八四年)故弘田貞守、内山柳太郎兩氏
(明治二十七年春)

越前敦賀、熊登七尾 (一八八四年、明治十七年夏)

備中安倉、賴島 (一八八二年、明治十五年夏)

備後鞆津 (全上)

壹岐、對馬 (一八九一年)波江元吉、土田兎四造兩氏
(明治二十四年春)其後平田駒太郎氏

筑前志賀島

豐後、大分、臼杵 (一八九九年、明治三十二年春) 寺崎留吉

(6)

日向細島 (一八九九年、明治三十二年春) 寺崎留吉

薩摩鹿兒島灣内櫻島 (一八九六年) 箕作教授、原十太
(明治二十九年春) 氏

薩摩甌島 (一八九九年、明治三十二年夏) 宮島幹之助氏

琉球沖縄 白岩金次郎、小川銀太郎、黒岩恒、田代安
定、西周、山岸進、宮島幹之助の諸氏八重山、石垣、入表宮古島 同上の諸
氏並に オーストン氏

臺灣一部分 多田綱輔氏、飯島教授

青森灣並に北海道の一部

海外の品は朝鮮仁川港、北米合衆國沿岸の品比較的に多し本邦沿海産地の中最も珍重す可きは相模洋とす、同所の深底三百尋位のところは他の無脊椎動物も然らん、一般に珍奇の品採集せられ尙將來も此地よりの獲物中には新しき種類も發見せらる可し

獨り憐む可きは本邦北方の蟹類の標品の乏しきなり固より氣候の寒冽と共に種屬は減縮するは當然なれとも未だ世に知られざる種類も往々發見せらる現に今日まで來着せる標品中に僅か一種一足位の代表者たるに係らず極めて珍奇のものあり日本海の沿岸に普通なる大形のタラバガニと稱するものさへ恐くは新種にして嘗て之を記載せ

る文書あらんかと久しく探りて未だ發見せざるなり

(次號 頁に接す)

●海産動物の着色に就て

(十三卷第百五十一號續き)

宇野太郎譯

イソギンチャクの光輝ある美なる色は之れを保護色又は警戒色と一般に云ふと克はざるなり如何となれば保護色とすれば大口魚に對して最早恐るべき餌に非ず又警戒色とすれば小魚がイソギンチャクの群生中を游泳するを見ればなり特に支那海に於て赤色の小魚が體の直徑二尺にも及ぶイソギンチャクの胃中を隠れ家とする實例あればなり又イソギンチャクの着色は多の場合に於て保護色ならざるを示す其證明は英國東海岸の岩窟中或は西海岸の岩石の割れ目を一見すれば充分なり此等の場所に於ては橄欖色の海藻及他の海藻が其等と全く色を異にする *Anthea cerens* (イソギンチャクの種類) と共に岩石に附着し而して其長く垂れたる綠色及赤色の獨手は海潮の波